

## 今週のメニュー

[トピックス](#)

松山市民ホールモニュメント - ことばのちからが絆を深めている -

[随想](#)

ひとつ屋根の下 (連載45)

金沢工業大学大学院・東京大学大学院 上野 潔

[編集後記](#)

## トピックス

松山市民ホールモニュメント - ことばのちからが絆を深めている -

愛媛県松山市は2000年にまちおこしのイベントとして、「ことばのちから」の「だから、ことば」を大募集され、市長賞に桂綾子さんの作品「恋し、結婚し、母になったこの街で、おばあちゃんになりたい!」が選ばれました。

5年後に日本ペンクラブの集会で松山市を訪れていた芥川賞作家の新井満さんがこのことばに感心して、即興でことばを少し足して一晩で歌詞に書き上げ、ご一緒されていたエッセイストでピアニストでもある三宮麻由子氏が作曲されて、市民ホールで新井氏が歌われました。その翌年に完成した「この街で」がCD化されて、新井氏が松山市にプレゼントされ、松山市民の愛唱歌になりました。昨年7月にトワエモアの歌として発売されてから、ふるさとを想う心が全国へ広がっています。

この即興で書かれた「この街で」の歌詞のモニュメントが昨年9月上旬に松山市総合コミュニティセンターホールに10m×12mの大きさに設置され、松山市民がその上を歩いています。このモニュメントに一役買っているのが塩化ビニル樹脂の床材です。

400字詰め原稿用紙に鉛筆で書いては消して跡も残る様子を見事に表現できる印刷性と、イベントも行われるホールで多くの市民が歩くときの耐久性にも強い素材として選ばれたと聞いています。

この「ことばのちから」を市民運動に育てた方がことばのちから実行委員会の山内敏功委員長です。今回、実際のモニュメントを拝見し、これまでの背景をお聞きして、その取り組みに感激し、また、嬉しくなりました。

10年ぶりに、「絆～きずな～」をテーマとした「だから、ことば」の募集が行われて、全国から1万二千余りの作品が寄せられました。一次選考の100作品について市民審査が行われ、今年2月に入選25点の



「この街で」歌詞モニュメント  
(クリックで拡大)



2010年入選作品  
(クリックで拡大)

表彰式が行われました。市長賞は美山重功さんの「亡き父の靴履いて出かける入社式」で、会場には作品をデザインした7mの垂幕がつるされていました。[\(詳しくはこちらから\)](#)この垂幕の素材も実は塩化ビニル樹脂で出来ています。松山城に登るリフトやケーブルからも見られるように多くの垂幕が元気なことばを載せて活躍しています。



リフトからも作品が見られます。  
(中央の白い垂幕)

今、東日本大震災に遭われた方々への支援が広がっていますが、物資とともに、ことばをちからとする絆が深まることが大切だと思います。「この街で」のことばは肩にちからをいれたガンバリよりも静かに心を元気にするちからを与えることができると感じました。いつか生まれたふるさとへ戻れることを祈りつつ、「この街で」を口ずさんで下さい。そのとき、このモニュメントが絆で結ばれたあなたの足元で輝くことでしょう。

(了)

## 随想

### ひとつ屋根の下(連載45)

金沢工業大学大学院・東京大学大学院 上野 潔

「ひとつ屋根の下」という言葉があります。1993年頃放映されたテレビドラマのタイトルだそうです。私は見た記憶がありませんが、ひとつの家の中で家族同然の暮らしをしているホームドラマだそうです。いろいろけんかしても気心が知れて仲良くなるのでしょうか。転じてビジネスの世界では同じ建物の同じ部屋で仕事をすれば効率がよくなることを意味します。最近の科学技術の分野では、科学と技術の融合を促進し、産と学との連携を加速する最も有効な手段として、「Under one roof」つまり「ひとつ屋根の下」で研究開発を行い研究施設の共用も図るべきであるとしています。最近はこれに「ネットワーク化」の必要性が追加されています。

全く同感なのですが、ここで米国NASA(アメリカ航空宇宙局)の事例を思い出します。20年以上前ですが、日本で、有人宇宙開発のワークショップを開いたときの話です。日本は、米国に比べれば小さな組織ですが、当時はNASDA, ISAS, NALと3組織が連携し、そして時には競合して宇宙開発に取り組んでいました。日本で開催したワークショップでしたが、米国からも多数の参加者を迎えました。

殆ど全員がNASAの研究者であったと思います。NASAには、エイムズ研究センター、ジェット推進研究所、ゴダード宇宙飛行センター、そして有名なケネディー宇宙センター、ジョンソン宇宙センターなど多数の巨大施設があります。それぞれが研究開発を行っています。それらを統括しているのが首都ワシントンにあるNASA本部です。

さて、そのワークショップでNASAの研究者が次々と登壇して有人宇宙開発の研究成果を発表するのですが、ワークショップなのでかなり狭い範囲の内容になります。そこで、各人が一様に冒頭に話す内容が、

「私のミッションは全体の中のこの部分で、境界部分はこのように定義され、ここから以降はどこのセンターの範囲で、私のミッションはこの範囲です。さらにこの範囲の中で、合意されたスケジュールではここまでやることになっています」と言ってから、やっと研

究内容の説明に入るかと思ったら、

「研究はこれから始めます」でした。何と半年も「仕事の範囲(自分のミッション)」を決めることに時間と精力を費やしているのです。もちろんその前に予算獲得のための膨大な時間も費やしているのです。

日本のお役所仕事どころではありません。よく言えば契約と責任の世界、悪く言えば自己保身の世界があるのでした。巨大組織の中で研究するためには自分のミッションの範囲を確定し、他人の領分を侵さないことがもっとも大切なのです。

ここ数年、日本の科学技術開発は、自由奔放さがなくなり再び「何でも米国志向」になっている気がします。ときどき訪問する日本の大学や研究機関では、空き家が多く閑散としている建物を見かけます。40年前の私がいた大学では、屋上や廊下に部屋を作って研究している若手の先生がいました。(今から思えば違法だったのでしょうか)

そしてどの部屋も学生で溢れていました。空調が入っていたのは大型電子計算室だけでした。会社に入ってから、米国や欧州に出張すると民間会社でも役所でも、担当者が個室に入っているのを見てびっくりしたものです。立派な施設で研究開発が出来ることは本当によいことだと思いました。

日本も豊かになり、「おーい」と呼べば聞こえるような、白熱した議論がもれてくるような、そんなひとつ屋根の下での研究は夢になりました。今までが惨めな環境でありすぎたから、立派な建物と立派な共用施設が実現できる時代になったのです。

しかし、「Under one roof」と言いながら実際は「Under many buildings」になってしまうのが現実です。日本の企業も海外を含め多数の研究所を保有しています。企業ですからもちろん重複研究などの無駄はありえないことです。かつては4階建ての風格ある研究所の建物も、今では高層ビルの研究棟に変わっています。確かにひとつ屋根には違いないのですが、土地の限られた日本では新しい研究拠点を建設するとなると、当然ながら複数の高層ビルになります。研究のミッションは各ビルと各フロアにわかれ、幹部は応接セットがある広い個室に収まり、研究者は若手でもセミ個室かパーテーションで区分された机が与えられるでしょう。隣の人ともメールで情報交換するような状況では、コミュニケーションが大切だと声高に叫ばないと研究者間の連携は難しくなります。研究開始前に仕事の分担や範囲を明確にすることが最も重要な事項になります。外国人も多数在籍するでしょうから、公用語が英語の会社も多くなりました。

ひとつ屋根の理想が、ミニ NASA になっては困ります。巨大な研究拠点は研究者の本来の自由と文化の引き替えに、研究の重複とムダを避けるためのインターフェース調整とミッションの明確化に多大の時間と労力が費やされるためでしょう。

予算が大きくなると研究者と研究管理者の失敗はますます許されなくなります。同じテーマを複数のチームで競わせるなんていう、激しい開発競争は予算の無駄使いとされとても許されないのです。決められたミッションだけをこなせば成果になるのですが、それではブレークスルーになる新技術や製品は生まれにくいでしょう。新たな巨大研究拠点が壮大な官僚組織を作り上げないよう、最新の注意が必要です。短期勝負の民間企業にはそんな心配はありませんが。(了)

前回：[「未来予測と先見の明」\(連載44\)](#)

## 編集後記

桜も満開となり、一気に春らしい暖かさになってきました。しかし、余震、放射能騒ぎに加え、テレビを見ればコマーシャルの自粛、節電による照明の削減など町中が暗くなり、同時に繁華街への人出も減っているようです。節電で暗くなるのはやむを得ないとしても、消費活動はもう少し活発化しないと経済全体の地盤沈下が心配になります。どなたかが言われているように自粛の自粛がそろそろ必要な時期ではないでしょうか。暗い世の中をなんとか元気で明るくしましょう。(可)



## 関連リンク

[メールマガジンバックナンバー](#)

[メールマガジン登録](#)

[メールマガジン解除](#)



編集責任者 事務局長 東 幸次

東京都中央区新川 1-4-1

TEL 03-3297-5601

FAX 03-3297-5783

URL <http://www.vec.gr.jp>

E-MAIL [info@vec.gr.jp](mailto:info@vec.gr.jp)

---

---